

2024年7月2日

ウェザーニュース、「ゲリラ雷雨」の予想発生回数を47都道府県別に発表  
ゲリラ雷雨はおよそ8.7万回発生、ピークは8月中旬の予想  
～平年より暑い夏、気温上昇と湿った空気の流れ込みでゲリラ雷雨発生数が増加～

株式会社ウェザーニュース(本社:千葉市美浜区、代表取締役社長:石橋 知博)は、突発的かつ局地的に激しい雨や落雷をもたらす「ゲリラ雷雨」(※1)に対し、事前対策への意識を高め被害軽減につなげるため、「ゲリラ雷雨傾向 2024」を発表しました。7～9月のゲリラ雷雨は、全国でおよそ87,000回発生する予想です。昨年と同程度の発生回数となり、過去5年平均と比べるとやや多くなる見込みです。発生のピークは8月中旬の見通しです。突発的かつ局地的なゲリラ雷雨に備えて、随時最新の雨情報をご確認ください。毎年、突然の激しい雨やひょう、落雷などによる被害が全国各地で発生しています。ウェザーニュースでは、少しでも被害を減らすべく、継続的に情報を発信していきます。

「ゲリラ雷雨傾向 2024」一般向けページはこちら

ウェザーニュースウェブサイト「ゲリラ雷雨傾向 2024」  
<https://weathernews.jp/s/topics/202407/020085/>

#### ◆ ゲリラ雷雨発生傾向 2024

##### ＜発生回数:全国の総発生回数は約8.7万回＞

2024年7～9月のゲリラ雷雨は、全国でおよそ87,000回発生する予想です(図1)。全国の総発生回数がおよそ93,000回だった昨年と同程度となり、過去5年平均と比べるとやや多くなる見込みです。

北日本では昨年よりも発生回数が少なくなる予想です。特に北海道と青森県では昨年の半分以下の発生回数となる見込みです(図2)。西日本と東日本では昨年並の発生回数のところが多く、東京都では1,050回(昨年比1.0倍/例年比1.0倍)、愛知県では1,470回(昨年比1.0倍/例年比1.1倍)、大阪府では730回(昨年比1.5倍/例年比1.7倍)となる予想です(都道府県別の数字は表をご覧ください)。

雨雲の発生は山沿いが中心となりますが、発生した雨雲が平野部(都市部)へ流れ込んだり、直上で雨雲が発生したりすることもあります。一回のゲリラ雷雨でも、激しい雨による冠水や浸水、ひょうによる被害、落雷による停電や交通機関への影響など様々な被害が懸念されます。随時最新の雨情報をご確認ください。

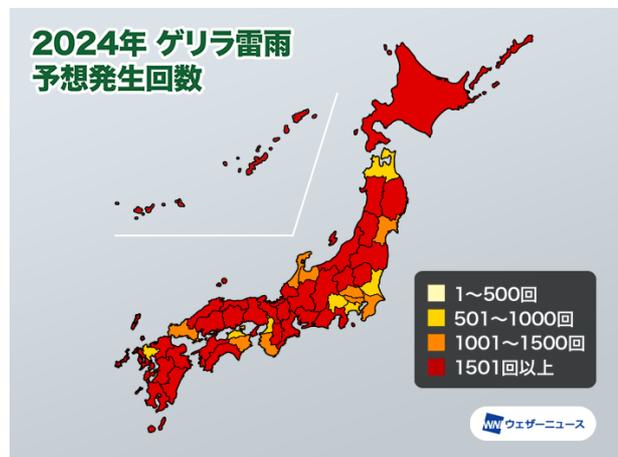


図1. ゲリラ雷雨 予想発生回数

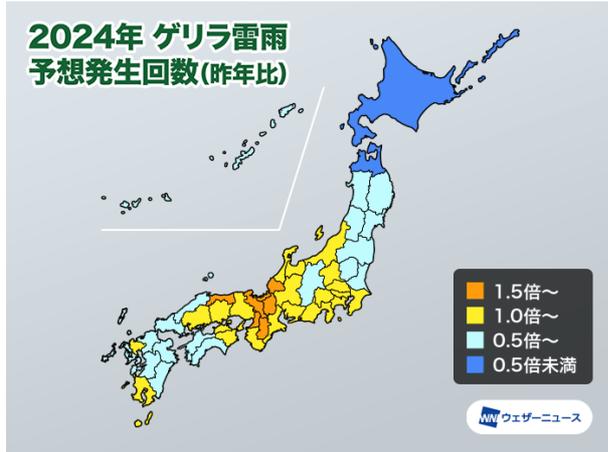


図 2. ゲリラ雷雨 予想発生回数(昨年比)

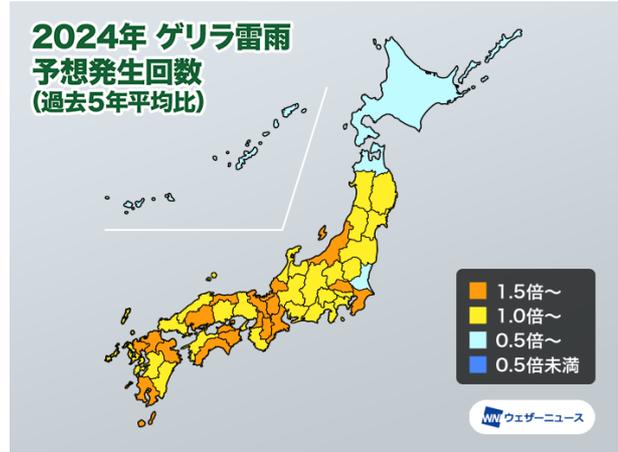


図 3. ゲリラ雷雨 予想発生回数(過去5年平均比)

<発生時期:8月中旬に多く発生>

ゲリラ雷雨は、気温の上昇や湿った空気が流れ込むことで、大気の状態が不安定になる時に発生しやすい現象です。今シーズンのゲリラ雷雨は8月中旬に発生しやすい見込みです(図4)。

梅雨明け後の7月下旬から晴れる日が多くなり、ゲリラ雷雨の発生回数が増えてくる見込みです。8月は日本付近を太平洋高気圧とチベット高気圧が重なるように覆います。このため気温が上がりやすく、今夏も暑さが厳しくなる予想です。二つの強い高気圧に覆われると雨雲の発生は抑えられるものの、中旬は一時的に高気圧の勢力が弱まるため、湿った空気が流れ込みやすくなります。このため、急な雨雲の発生・発達ができやすくなる見込みです。9月も残暑が厳しいためゲリラ雷雨の発生が予想されますが、台風や秋雨前線の影響を受けやすい見込みです。このため、突発的かつ局地的なゲリラ雷雨の発生は徐々に減少していき、ゲリラ雷雨のシーズンも終息に向かう見通しです。

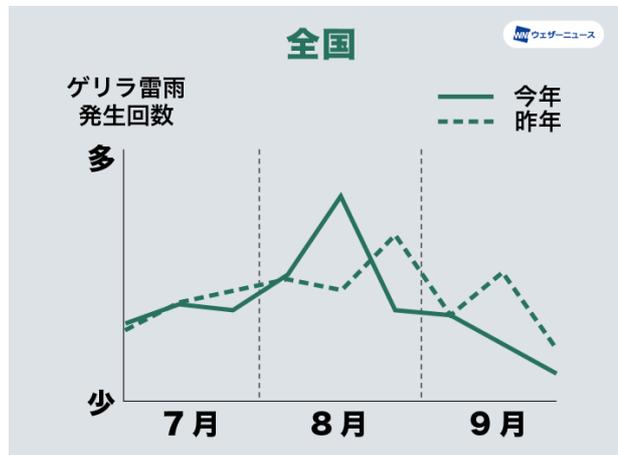


図 4. 7~9月のゲリラ雷雨発生傾向

<要因:気温の上昇と湿った空気の影響で発生するパターン>

今シーズンは、日本付近は太平洋高気圧とチベット高気圧に重なるように覆われる予想です。このため晴れて気温が上がりやすくなります。強い高気圧に覆われていると雨雲は発達しづらくなりますが、一時的に二つの高気圧の勢力が弱まるタイミングがあり、湿った空気が流れ込みやすくなります。このため、気温の上昇と南から流れ込む湿った空気の影響でゲリラ雷雨が発生するパターンが多くなるとみられています(図5)。

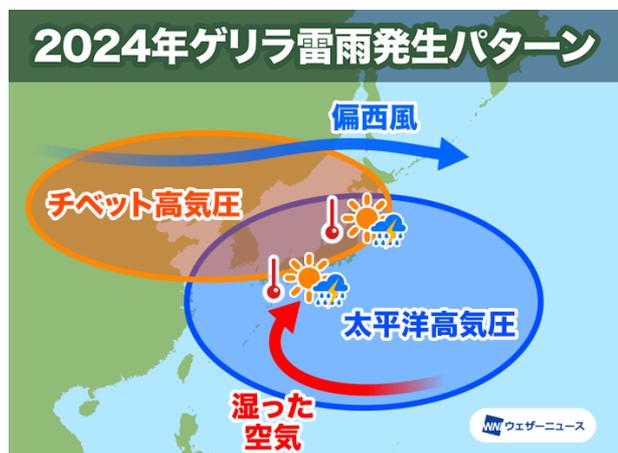
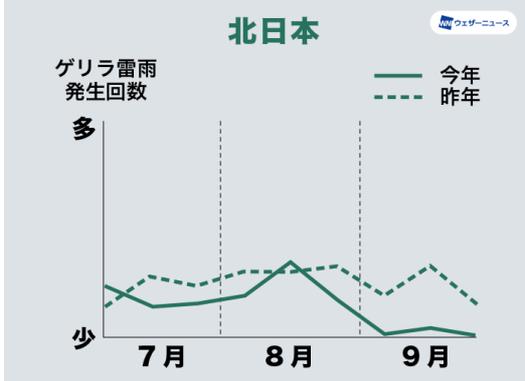
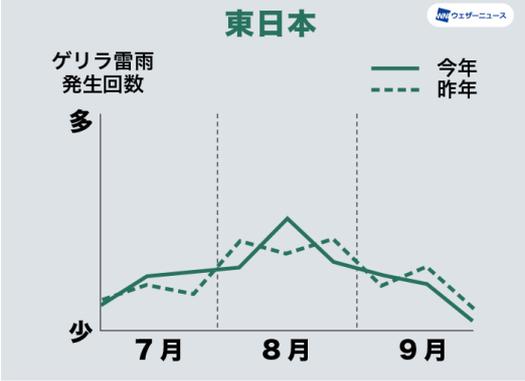
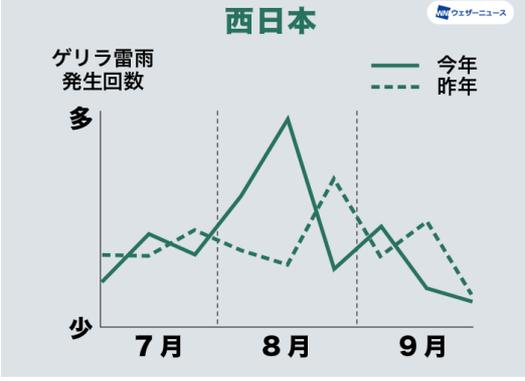


図 5. 2024年ゲリラ雷雨発生パターン

**◆ エリア別のゲリラ雷雨傾向**

<b>北日本</b>	<p>北日本のゲリラ雷雨の総発生回数は約 15,000 回の予想です。約 25,000 回発生した昨年と比べると、およそ 0.6 倍で少なくなる予想です。道県別にみると昨年を下回るところが多く、北海道や青森県では昨年の半分以下の見込みです。</p> <p>今年は強い高気圧に覆われるため、雨雲の発生や発達を抑えられ、発生数が少なくなります。気温の上昇の影響で大気の状態が不安定になることで、山沿いでゲリラ雷雨が発生するパターンが多くなる見込みです。発生ピークは 8 月中旬の見込みです。</p>	
<b>東日本</b>	<p>東日本のゲリラ雷雨の総発生回数は約 28,000 回の予想です。約 25,000 回発生した昨年と比べると、およそ 1.1 倍で昨年と同程度の発生回数となりそうです。</p> <p>梅雨明け後、7 月下旬からゲリラ雷雨の発生回数が増えてきます。今年は強い高気圧に覆われるため、雨雲の発生や発達が抑えられる予想ですが、8 月中旬は一時的に高気圧の勢力が弱まる見込みです。このため、特に 8 月中旬にゲリラ雷雨の発生回数が増える見通しです。気温の上昇と湿った空気の影響で大気の状態が不安定になることで、ゲリラ雷雨が多く発生します。</p>	
<b>西日本</b>	<p>西日本のゲリラ雷雨の総発生回数は約 40,000 回の予想です。約 37,000 回発生した昨年と比べると、およそ 1.1 倍で昨年と同程度の発生回数となりそうです。</p> <p>梅雨明け後、7 月下旬からゲリラ雷雨の発生回数が増えてきます。今年は強い高気圧に覆われるため、雨雲の発生や発達が抑えられる予想ですが、8 月中旬は一時的に高気圧の勢力が弱まる見込みです。このため、特に 8 月中旬にゲリラ雷雨の発生回数が増える見通しです。気温の上昇と湿った空気の影響で大気の状態が不安定になることで、ゲリラ雷雨が多く発生します。</p>	

### ※1 「ゲリラ雷雨」について

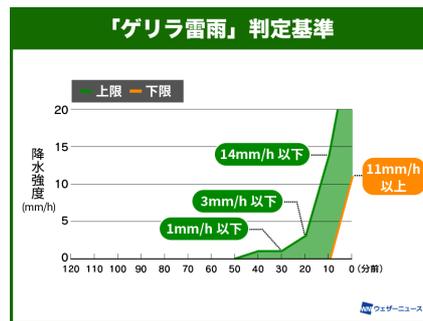
本プレスリリースでは、「局地的大雨」を指す言葉として「ゲリラ雷雨」という言葉を使用しています。一般あるいはメディアでよく使用されている「ゲリラ豪雨」と同義です。

### ※2 「ゲリラ雷雨」発生回数の求め方

「ゲリラ雷雨」をもたらす雨雲・雷雲は“突発的”かつ“局地的”に発達するのが特徴で、予測が難しいとされてきました。また、限られた数しか設置されていないアメダス(全国約 1,300 か所)では、全ての降雨を正確に観測することは困難です。そこで当社では、スマホアプリ「ウェザーニュース」のユーザーから寄せられた“ザーザー”以上の降雨報告(※3)と、その時の気象データの分析結果から、ユーザーがゲリラ雷雨と感じる雨の時間変化の基準値(表 1)を求め、求めた基準値をもとに 10km 四方でゲリラ雷雨をカウントしています。

時間(分前)	閾値
0	11mm/h 以上
10	14mm/h 以下
20	3mm/h 以下
30~40	1mm/h 以下
50~120	0mm/h 以下

表 1:「ゲリラ雷雨」判定基準



### ※3 降雨報告について

スマホアプリ「ウェザーニュース」を通し、“ポツポツ”、“パラパラ”、“サー”、“ザーザー”、“ゴォー”の 5 段階で報告されます。

**◆ 都道府県別のゲリラ雷雨傾向**

都道府県	2024 年				2023 年 (回)	過去 5 年平均 (回)
	発生回数 (回)	10km 四方ごとの 発生回数(回)	2023 年比 (倍)	過去 5 年平均比 (倍)		
北海道	4310	4	0.4	0.7	10665	6040
青森県	740	7	0.4	0.7	1820	1010
秋田県	2230	19	0.9	1.4	2358	1580
岩手県	2410	15	0.8	1.3	3100	1840
山形県	1690	18	0.8	1.2	2182	1380
宮城県	1280	17	0.8	1.2	1575	1030
福島県	2770	21	0.8	1.0	3575	2650
茨城県	750	13	0.7	0.9	1044	870
栃木県	1520	24	0.7	1.0	2070	1500
群馬県	1840	30	1.0	1.3	1788	1370
千葉県	1440	27	1.4	1.7	1029	860
東京都	1050	60	1.0	1.0	1104	1010
埼玉県	1020	28	1.4	1.7	754	600
神奈川県	580	24	1.1	1.3	528	430
山梨県	970	23	1.1	1.4	852	710
長野県	2650	20	0.9	1.1	2988	2330
静岡県	2250	29	1.2	1.4	1949	1590
愛知県	1470	29	1.0	1.1	1478	1300
岐阜県	3010	28	1.1	1.2	2836	2490
三重県	2310	40	1.4	1.6	1605	1450
新潟県	3360	26	1.3	1.5	2645	2230
富山県	1050	25	1.0	1.2	1020	900
石川県	1030	24	1.1	1.2	951	840
福井県	1580	38	1.5	1.9	1062	840
滋賀県	1460	38	1.6	1.8	917	820
京都府	1800	40	1.6	1.7	1132	1080
奈良県	1970	56	1.5	1.9	1343	1030
兵庫県	2110	25	1.1	1.3	1835	1640
大阪府	730	39	1.5	1.7	488	430
和歌山県	1470	32	1.1	1.4	1288	1020
鳥取県	1870	28	1.6	2.3	1146	800
島根県	1890	55	0.9	1.4	2077	1400
岡山県	1970	28	1.4	1.4	1391	1360
広島県	2600	30	1.3	1.5	2064	1720
山口県	1490	23	0.9	1.1	1750	1300
香川県	590	29	1.2	1.5	511	400
徳島県	1270	32	1.3	1.7	952	740
愛媛県	1660	28	0.8	1.3	2025	1230
高知県	2140	31	0.9	1.5	2348	1470
福岡県	1980	40	0.9	1.5	2162	1350
大分県	1690	27	0.9	1.5	1816	1150
佐賀県	870	37	1.0	1.6	868	560
長崎県	1860	58	0.9	1.3	2004	1460
熊本県	1870	26	0.7	1.1	2640	1640
宮崎県	2570	35	0.9	1.4	2884	1830
鹿児島県	3960	58	1.0	1.5	3817	2720
沖縄県	4210	156	0.8	0.9	5154	4780
全国(合計)	87340	1540	0.9	1.3	93590	68780

\* 本傾向は、ウェザーニューズの長期予報と類似年の過去データを元に、統計的に算出したものです。

\* 発生回数は 7 月 1 日～9 月 30 日の期間で算出しています。